

<b>Title</b>	われ、ここに立つ
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume5, 1991.3 : 1-7
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2990">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2990</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## われ、ここに立つ

大 木 英 夫

先日ドイツの社会学者マッテス教授が聖学院大学総合研究所に来て講演されました。その後、質疑応答で、今日世界に広まっている個人の人格性という人間理解は、ルターが源流であるということを言われました。源流を見つけるということは、感動的なことであります。東京に神田川という汚れた川があります。それが井の頭池の湧き水が源だということを知っている人がいると思います。ライン川の源流或いは大黄河の源流を見る、それは感動的なことであります。スコットランドにスベイ川というかなり大きな川があります。それは北海に注ぎます。その源流はハイランドのツンドラから流れでるのであります。その源流をわたしは見たことがあります。それを見た後、旅を続け、やがてその河口の近くを通りました。あの源流がここまできている、そんな感想を懐いたのであります。恐らくマッテス教授は今日の日本の若者たちが、自由とか人格とかいうことを聞いたら、そんな感想をいだくのではないのでしょうか。というのは、日本の昔、正確に言えば一九四五年以前は、個人とか自由とかを決して肯定的には考えなかったからであります。戦争中に出た『国体の本義』という本には、真向からの西欧的個人主義批判があります。それは日本の国体にそぐわない思想だと見たのであります。それは眼に見えない流れであります。そして同じように源流があるので

あります。その流れは、今や、近代世界に至る所に広まっているのであります。

この前天皇家の次男礼宮が自分が選んだ大学の先輩と婚約しました。梢の揺れに風が吹いているのが分かるように、それも眼に見えない風の動き、流れがあることを示しています。現代の若者たちは、個人の尊重、自由をエンジョイしています。その源流はどこにあるのでしょうか。われわれは歴史を遡って、場所はライン川に沿うドイツの古い町ヴォルムス、時は一五二一年四月一七日と一八日の出来事に至らなければなりません。この事件は、世界的事件と言つて良い。むかし堀米庸三は、アシジのフランチェスコとインノケンチウス三世との会見を世界的事件と呼びましたが、これはそれに勝るとも劣らぬ重要な事件であつたのであります。今日の説教の題「われ、ここに立つ」という言葉は、その出来事の中で発せられたと伝えられる有名な言葉であります。「Hier stehe ich, ich kann nicht anders, Gott hilfe mir. Amen!」——ヴォルムスで開かれた帝国会議で、カール五世（彼はシャルマーニュ以来の大領土の支配者）と一介の修道士、自らをドイツ農民の子と呼び、卑下して自己を「蛆虫」と呼んだマルティン・ルターとが対面しています。これは、最近の日本シリーズどころではない、世界的衆人環視の大舞台であつたのであります。ルターは確かに恐れました。しかしやがて福音の真理に固く立つて、最後にそう答えたのであります。或る歴史家は、「ここに過去と未来が落ち合っていた。この一点に、現代の始まりを見るだろう」と書きました。昨日の新聞にルター像が運ばれていく写真が載っていました。それはドイツの幾つかのルターゆかりの地に建てられている、開かれた聖書をもつて毅然と立つルターの銅像であります。それが東ベルリンに運ばれて行くのであります。そしてそこで今やあの自由を求める運動を励ますことになるのであります。第二次大戦後かえつてこのようにルターから始まる流れは滔々として全世界を押し流すようになったのであります。

しかし、よく注意しなければならないことがあります。ここでルターの主体性を支えたのは、その背後に「神よ、

われを助けたまえ」という祈りがあつたというのであります。神によって背後から支えられた主体性であります。今日は十月三十一日、今から四七二年前、今日アメリカではハローウィン（これは All Hallow's Day, All Saints Day の前夜 Even [ing] … Abend を意味する）という子供の楽しい祭りになっていますが、その日にヴィッテンベルグの城教会の扉に九十五ヶ条討議命題を掲げて、宗教改革が始まつた、その記念日であります。本日読んだローマ書一章一七節は、ルターがそれによつて福音の真理を発見した聖句であります。「神よ、われを助けたまえ」と祈る、その祈りの背後にこの福音の真理の発見があつたのであります。それはそう祈ることが出来る神を知つたということであり、この神の前に、地上最大の権力者カール五世もルター自身も、平等に立っている、しかもその神は弱い自分を助けて下さるお方だということを知つたのであります。本当の強さとは、自分が罪人であることを知り、しかもその罪から救われているということであり、それは福音の真理の発見によつて裏付けられたキリスト教的主体性であります。ヴォルムスの「われ、ここに立つ」は、この真理を実証することでありました。そこに特別の意味があります。そしてこれが——カトリックの思想家マリタンが否定的な評価ながらも認めているような——近代的人間の主体性の原型なのであります。

しかし、それから今日に至る間、何か重大な変化が起こつたのではないのでしょうか。近代人は自分だけで強くあるうとしたのではないのでしょうか。しかし、ルターの背後にあつた神、そしてルターの祈りを失つて、むしろ人間は弱くなつたのではないのでしょうか。もし将棋をする人ならば、この譬えを理解できるでしょう。「吹けば飛ぶような将棋の駒」という歌があります。その中でも歩は一番弱い駒です。しかしもしその後ろに金将や銀将が付いているとそれは取れません。もし後ろについていないで、ひとり離れているなら、それはまさに「吹けば飛ぶような」駒に過ぎないのであります。それはすぐ取られてしまいます。今日の人間は形ばかりはルターの、無自覺的にルターのであり

ます。カトリックは個人的でなく、共同体的であります。しかしその源流から流れて世界中に広がった近代人の自由とか人格とか、それはその裏付けなく、「吹けば飛ぶような」ものになってしまったのであります。

最近の若い世代の大事事件は、この埼玉県を舞台として起こった幼女誘拐殺人事件であります。それは政府にも衝撃を与えたようで、首相は二十一世紀懇談会なるものを設置して、教育問題を有識者に考えてもらうとか、そして梅原猛氏が座長になるとか、報道されました。この事件は、孤独な一人の若者の犯罪であります。この人の部屋は一杯ビデオで埋まっていたそうです。そしてその影響を決定的に受けたのであります。この青年は、警察の尋問を終えると、ありがとうございました、お世話になりました、と挨拶したそうで、不気味な感じさせると捜査にあたった係官が言いました。何か影のように主体性がないのであります。これはいかに情報社会に巻き込まれたかを示しているのであります。根無し草というべきか、あの残酷な犯罪へと自分で行ったというよりは、行かせられた、この影のような青年、その背後にその主体性を支える何もないのであります。その背後にあるのはルターを支えた神ではない、そこにいるのは悪魔ではないでしょうか。哀れにもこの青年は悪魔的なものによって逆に捉えられてしまっているのです。ルターの自由とは、悪魔に勝つ自由であったのであります。罪に敗北するのではなく、罪に勝利する自由であったのであります。ルターは人間が弱い存在であることをよく知っていました。そのままでは「吹けば飛ぶような」者でしかない、しかし背後に神がついている、そこで自由が、悪に負けない力となるのであります。現代人の自由、それは名前は同じく自由だが、この不幸な青年のように、それはビデオの世界にのめり込み、暗い情熱をかき立てられ、死へと誘われていく自由となつているのであります。この似ても似つかぬ自由と個人、それはあの井の頭公園の湧き水が下流の濁流となつたような変化ではないでしょうか。ということとは、近代の人間は、神の裏付けなしには、かえって悪魔的なものによって捉えられてしまうからであります。神なき自由は、人間を墮落させるのです。

今度の短大の卒業式は、デパートの貸衣装スタイルでなくなることは喜ばしいことでもあります。ガウンにするそうですね。昨年度の卒業式でわたしは驚きました。後ろから見たら最近の宣伝という大きな手によって捕まえられているように見えたからであります。わたしはそのような女性が母になったら子供たちはどうなるだろうと思いました。海部首相は中学受験に落第した人らしいですが、母がここだけが中学でないと励ましたと言うのであります。立派な母だと思います。今日、本当の女性の自立が重要ではないでしょうか。

人生は確かに将棋に似ているところがあります。香車のような人間、飛車のような人間、角のようにその才能を斜に走らせる人間、桂馬みたいにビヨンビヨン跳んでいく人間いろいろです。その中で歩はもっと一般的であります。もしルターが発見した福音の真理を将棋で譬えるなら、神は、向こうからその歩を自分の金将を犠牲にして取り、そしてこちら側で用いる名人のように、罪に落ち無に等しいこの自分を取り出して、義と認め、生かして用いて下さるお方だ、ということを発見したことであります。それが「義認」という教えであります。神が歩を回転させて金に成らせる、歩が金将と同じに成る、神は歩に等しい者を「成金」として——それは今の日本人のようにわか金持ちの成金ではない——用いられるのであります。ルターはヴォルムスで正にこのような「成金」のようであつたのであります。その背後に神の御手があつたのであります。

聖学院は日本でただ一つ、この伝統を自覚的に受け継ぐために立てられたプロテスタント大学であります。この大  
学は、そこで歩がひっくり返させられて金となるような、人間の大きいなる転換の場所であります。もしわたしたちがひっくり返されて「成金」となり、つまり回心して、振り返って見るならば、ここはあのドイツのライン河畔のヴォルムスと繋がっているのを見出すことでありましょう。聖学院はわたしたちの「ヴォルムス」であります。

埼玉県は、川が汚染されていることで日本一という汚名をもっています。それは眼に見える川だけでない、日本全

体は今、眼に見えない精神の川も汚染しているのではないでしようか。聖学院は、精神の川を浄化するのであります。これは恥ずべき言葉と思いますが、「赤信号、皆で渡れば怖くない」という言葉があります。思えば、昨年今頃から所謂\*「自粛ムード」なる驚くべき現象が日本を支配し出しました。それは主体性の弱さを暴露したことでないでしようか。聖学院は、みんなが悪へと向かうとき、ルターのようにひとり聖書によって固くキリスト教的自由人となる人間が出る場所なのであります。そういう自由、それをルターは、このヴォルムスの出来事の前年、一五二〇年に書いた『キリスト者の自由』で、王者の自由と言いました。それがカール五世と対等に立つ自由であったのであります。しかもなおその自由を愛へと生かす、キリストのように人々に仕える愛への自由であります。聖学院のキャンパスはそのようなキリスト教的自由人の集まりとして完成するのでなければならぬと思います。滝野川教会に郡司さんという人がいます。この人は今は東大の医学部の教授であります。以前に厚生省から派遣されて鹿児島県の若い衛生部長になって行った時、その地の医師会のお歴々を前にその理想を実現せねばならないたなかいの中で、わたしには神がついている、と思ひながら、立派にその使命を果たしたのであります。「めだかは群れたがる」と言われますが、聖学院は、そんなめだかの群れではありません。また世界から響ひびく響を買かうような金銭的な成金ではない、歩が金になるといふ、神の御手の中にある「成金」になる生き方であります。今年度、女子聖学院短大の卒業の時ガウンを着るそのガウンは、ルターが着たガウンと同じ性質のものであります。それはルターと同じキリスト者の自由立つ生き方への晴着であつて欲しいと思ひます。皆さんがいるところが、皆さんのヴォヴォルムスだ。そこでルターと共に、「わたしはここに立っている。わたしはこれ以外であり得ない。神よ、わたしを助けたまえ」と祈る謙虚にして強靱な主体性、しかもその自由をもって生きる、聖学院はそのようにしてプロテスタントの伝統を日本の今に生かす、使命をもった大学であることを、この短大創立二十二年に、又大学創立二年に当たつて思いを新たにしたいと思うので

あります。

\*昭和天皇の病状悪化にともない、日本全体がいろいろな公的または私的（ある歌手は結婚式披露パーティーを「自粛」した）行事を中止するという一種の社会的抑圧状態を経験したが、それが「自粛ムード」と言われた。